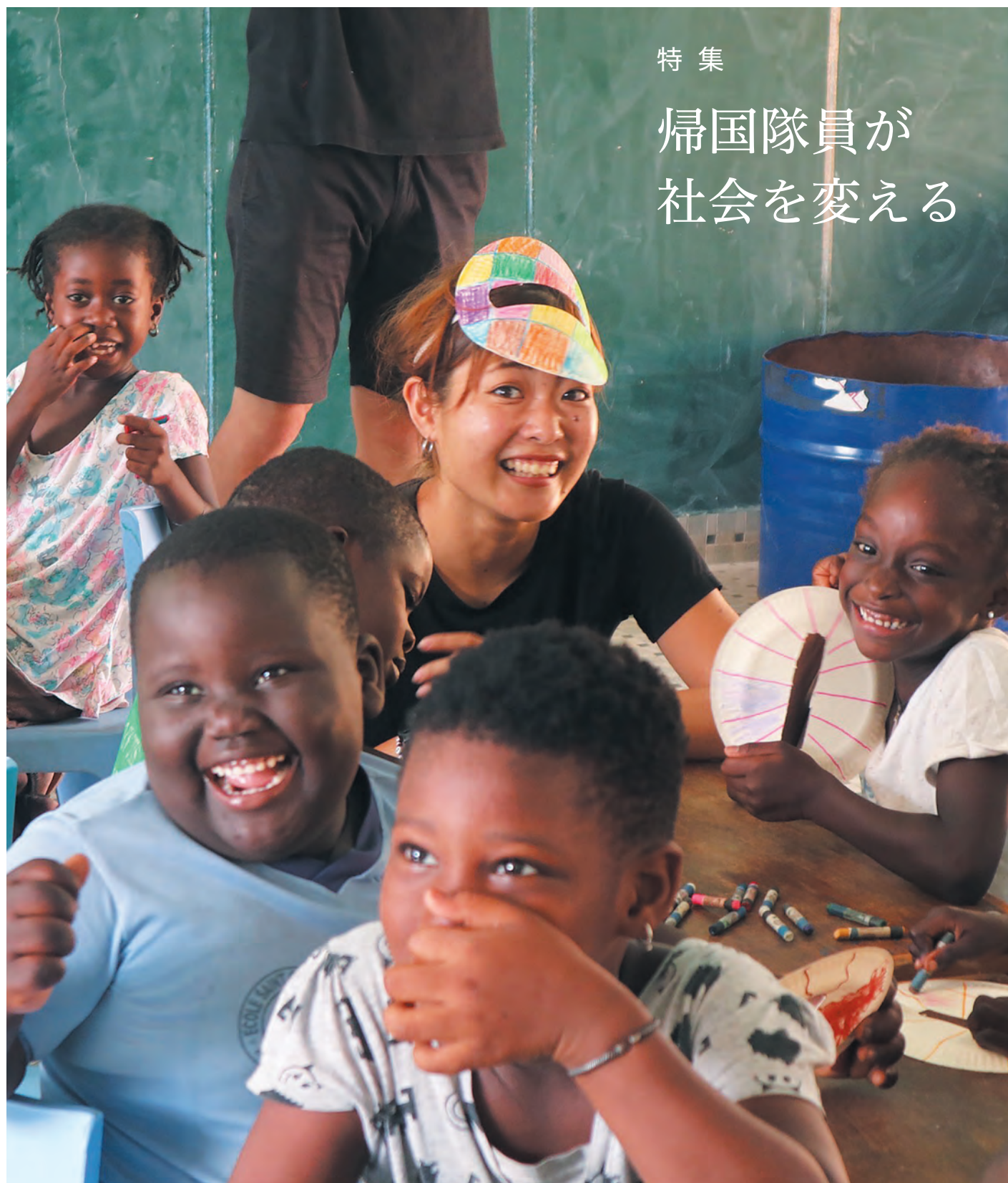


# クロスロード

10



特集

帰国隊員が  
社会を変える





子どもたちに  
伝えたいSDGs

世界の学校

「ボリビアの母の日」は、日本とは違い、毎年5月27日です。学校の休み時間に子どもたちを集めて、赤い薄紙でカーネーションの花を作りました。この日は月曜日で、みんな制服を着ています

## 日系人が多く暮らすボリビアでは 日本の文化や習慣が大切にされています

わたなべもえな  
渡邊萌捺さん（ボリビア／日本語教育／2018年度派遣・神奈川県出身）

南米のボリビアには120年以上の日本人移住の歴史があり、約1万3000人の日系人が暮らしています。私は「サンファン」という日本人移住地の小中学校に赴任しました。近くに沖縄出身者が多い「オキナワ」という村もありました。

移住地内の学校とはいえ、日系人は生徒の約25%で、授業はすべてスペイン語で行われています。英語とコンピュータは全学年で学び、農業と家庭科は5年生以上で学びます。

ボリビアの子たちは感情表現が豊かで、発表や劇がとて上手。授業でも間違つことを恐れずに「先生、合っているでしょうか?」とばかりに自分の意見を伝えてくれるので、授業中にもぎやかでした。

教室やトイレの掃除を児童や生徒が行ったり、水曜日は、朝礼で全校児童・生徒と先生と一緒に日本国歌のラジオ体操をしたりと、現地校にはない、日本的な活動の時間もありました。

日系人であっても世代を重ねるごとに、その文化や習慣は薄れていくもので、祖父母や両親が日本語を話せても、日常生活でスペイン語を使う子どもたちは、日本語が話せなくなります。そのため、週に8時間、日系の子は継承語として日本語を学び、ボリビアの子は選択式で日本語を学んでいました。

日本語を生かせる職業が少ないため、子どもたちのなかには日本語を勉強する目的がわからない子もいました。それでも、多くの日系人家庭がコマや大豆の栽培、養鶏などの農業に従事しているなかで、「時間を守る」「おつりの計算を間違えない」といった「日本的なこと」が仕事で役に立っているという声を聞くと、親は子どもに、日本語を通して日本の文化や習慣も受け継いでほしいと願っているように感じました。

# クロスロード

2021 OCT

## Contents



### 表紙によせて

お面作りに挑戦するクルムツサ村の子どもたち。毎年、パカンスの時期に教育系JICA海外協力隊と首都ダカールのYMCAスタッフが共同で開催しているキャンプ活動の一コマです。普段経験できない物作りやスポーツができるので、多い日には100人近くの子どもたちが参加してくれました。三島純菜さん(セネガル/小学校教育/2018年度1次隊・茨城県出身)

- 2 子どもたちに伝えたいSDGs ―世界の学校
- 3 ■Contents ■索引
- 4 JICA Volunteers' Reports
- 特集
- 6 帰国隊員が社会を変える
  - Case 1 農業を通じた町づくりで外国人との共生社会の実現へ  
NPO法人自然塾寺子屋(群馬県・甘楽町) 矢島亮一さん
  - Case 2 3Dプリンターで作る安価な義足で新興国を支援  
インスタリム株式会社(東京都千代田区) 徳島 泰さん
  - Case 3 自然体験で子どもたちと持続可能な社会を目指す  
NPO法人大杉谷自然学校(三重県・大台町) 大西かおりさん
- 14 派遣国の横顔 マラウイ  
～知っていますか?派遣地域の歴史とこれから
- 20 専門家に聞きました!  
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ
- 22 この職種の先輩隊員に注目! ～現場で見つけた仕事図鑑
- 24 あって良かったモノ
- 25 あの日、地球の、あの場所で。
- 26 先輩隊員のシューカツ記
- 28 派遣から始まる未来  
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員
- 30 待ってます、あなたを! ～各界からのエール
- 31 ウチのこだわり ―OB・OGショップ 国内編
- 32 JICA海外協力隊派遣現況
- 33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～
- 34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし
- 36 ウチのこだわり ―OB・OGショップ 海外編

■国別索引	掲載ページ
ウズベキスタン	10
ガーナ	21
キルギス	34
グアテマラ	36
コスタリカ	31
セネガル	1
タンザニア	20 24
トンガ	28
パナマ	7
パラオ	22
フィリピン	10 13
ベトナム	23
ペリース	5
ボリビア	2
ホンジュラス	7
マラウイ	15 18
モザンビーク	26
ヨルダン	25
ラオス	4

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	24
村落開発普及員	7 15 26
花卉栽培	36
土壌肥料	31
森林経営	15
冷凍機器・空調	22
経済・市場調査	25
理数科教師	13 21
青少年活動	5 34
珠算	28
日本語教育	2 4
数学教育	20
小学校教育	1 18
デザイン	10
障害児・者支援	23
福祉用具	10

※職種別索引の職種名は、JICA海外協力隊(経験者含む)の派遣時の名称を記載しています。

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	31
青森県	25
山形県	15
茨城県	1
群馬県	7 23
埼玉県	36
千葉県	5 18 34
神奈川県	2 21
富山県	22
静岡県	24
愛知県	28
三重県	13
京都府	7 10
島根県	10
広島県	26
高知県	4
福岡県	15

### 【凡例】

JICA海外協力隊の隊員(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協子さん(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)
氏名 派遣国 職種 隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行:  
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局



from Japan



## 事前キャンプの受け入れ断念 それでも派遣国を応援しました

Text・写真提供=村田浩子さん（ベリーズ/青少年活動/2006年度3次隊・千葉県出身）

「お世話になったベリーズのためにできることがあるのなら」と東京2020オリンピック・パラリンピックに出場したベリーズ選手団のホストタウン、千葉県横芝光町に転職したのが2019年。それから交流事業を企画・実施してきました。

ところが、国内の新型コロナウイルス感染拡大により、21年4月に町は選手団の事前キャンプの受け入れを断念。選手と町民が直接交流することはできませんでした。

2年前、交流事業の担当になってまず取りかかったのは、隊員当時の仲間・北村絃子さん（音楽/2006年度1次隊/ベリーズ在住）が副代表を務めるベリーズのスチールパンバンド「パンテンプターズ・スチール・オーケストラ」の招待です。

来日した中学生を含むメンバーは、町内の小中学校や駅前の交流施設で演奏を披露しました。中学校では生徒たちが空手や書道、浴衣の着付けといった日本文化を紹介し、中学生同士との交流も行われました。

また、当時ベリーズに派遣されていた木村諒子さん（環境教育/2017年度4次隊）が担当する小学校と当町の小学校をつなぎ、環境保全をテーマにした壁画の共同制作を行いました。

さらに、コロナ禍には現地のアスリート向け、横芝光町の人たちに寄付してもらったマスク約5800枚を届けました。

こうした交流を形に残そうと、ホストタウンオリジナルフレーム切手の作成も進めました。ベリーズの美しい自然や動植物などの写真をベリーズ政府観光局から取り寄せ、交流事業の様子を組み合わせてデザインしました。現地の総選挙などで時間を要しましたが、なんと大会前の21年7月の発行に間に合わせる事ができました。

町内すべての幼稚園から高校の協力を得て、ベリーズ選手団を応援する動画も制作しました。来日直前の選手と町内小中学生のオンライン交流でこの動画を紹介したところ、選手たちは子どもたちの応援に感激した様子でした。この交流イベントはベリーズにもライブ配信され、現地でも話題に上りました。

現地メディアに働きかけてくれたのは、JICAベリーズ支所です。同支所には、活動の要所支所で支援助していただきました。

また、協力隊OVにもさまざまな形で関わっていただき、多くのOVが派遣国への熱い思いを持ち続けていることを再認識しました。

3 帰国直前にベリーズ選手団から町に贈られたポロシャツ。サインが書かれている。村田さんは図書館にベリーズを町民に紹介するコーナーも作った

4 オリジナル フレーム切手「横芝光町×ベリーズ ホストタウン フレーム切手」（日本郵便株式会社）。ベリーズの美しい動植物などの写真とホストタウン事業の写真を組み合わせてデザイン



写真提供=日本郵便株式会社

from Laos



## コロナ禍、現場の状況に合った さまざまなオンライン授業を模索

Text・写真提供=甲藤 瞳さん（ラオス/日本語教育/2019年度2次隊・高知県出身）

ラオス南部にあるサワンナケート大学。国内で2番目となる日本語専攻コースができて4年目を迎えた日本語学科で活動し、1年生から4年生まで88名の授業を教員4名（ラオス人3名と私）で受け持っています。

2020年3月、私は新型コロナウイルス感染拡大により一時帰国しました。ほどなくしてサワンナケート大学では対面授業を再開。私も日本から何かできないかと手探りでオンライン授業を始めました。

しかし、教室には学生用のパソコンやWiFi設備がありません。幸い学生たちは皆スマートフォン（以下、スマホ）を持っていて、スマホでZoomを使って授業を行うことにしました。ネット環境が不安定なこともあり日本から私だけで授業を進めるのは難しいため、私が教案を作った、同僚教員たちに講義してもらったこともありました。

教室にいるときと同じように学生の様子を把握するには、私のパソコン1画面内で教室内の全員を見られるように、スマホの数を少なくする必要がありました。そこで、複数人で1台のスマホを使用してもらいました。

同僚との打ち合わせや学生への連絡・課題のフィードバックにはWhatsApp

ts Appを使うようになりました。休んだ生徒に向け、授業のポイントを伝える資料の保存もしています。

ただ、画面越しのオンライン授業は、学生たちの反応がわかりにくく、内容や進め方に常に悩みました。

一時帰国中は日本語教育隊員の報告会や日本語教育分野の勉強会がオンラインで活発に行われていました。私は再派遣の時期が見えず、オンライン授業の手応えも薄くてモチベーションが下がりがちでしたが、こうした講座への参加で活動のヒントが得られ悩みを相談することもできました。

20年12月に再派遣され対面授業を行っています。感染拡大によるロックダウンで大学が閉鎖になるときはオンライン授業に切り替えています。

21年6月には「漫才で覚える日本語」という授業を大学閉鎖中に行いました。これは、あるオンライン講座への参加がきっかけでした。

日本にいる吉本興業の漫才コンビ・フランポネさんとオンラインでつなぎ、学生に「漫才」を知ってもらい、最後は学生がクラスメイトやオプザーバー参加の日本人に向けて日本語で漫才を披露してもらいました。学生と私はラオスの自宅からの参加。学生同士がペアになり、ネタ作りや練習をZoomのブレイクアウトルームで実施。お披露目で笑ってもらえて、いい体験になったようです。



1 再派遣後の対面での授業（右端が甲藤さん）

2 一時帰国中に日本から行ったオンライン授業での集合写真。「オンライン授業のときは同僚の先生や学生たちが教室内の写真や課題発表中のビデオを送ってくれたのが助けになりました。そして、学生たちが出席し続けてくれたことがうれしかったです」

NHK「世界を応援しよう！  
ベリーズ×横芝光町」  
応援動画の一部は  
ここで見る事ができます



※1 WhatsApp: テキストや音声メッセージの送信、通話が可能で画像、ドキュメントなどを共有できるメッセージアプリ。  
※2 南アジア日本語教育フォーラム [第11回] 「漫才で覚える日本語」主催: JLESA (Japanese Language Education in South Asia), 2020年春頃から月に一度ほど、「コロナ禍での日本語教育」をテーマにセミナーやフォーラムを開催していた。  
※3 Zoomのブレイクアウトルーム: Zoom上のミーティング参加者を、少人数のグループに分け、その中で話し合いなどができる機能。



# 帰国隊員が

# 社会を

# 変える



Case1

自然塾寺子屋 理事長  
矢島亮一さん

多文化共生

自然環境保護



Case3

大杉谷自然学校 校長  
大西かおりさん

「世界を良くしたい」と使命感を持って赴任したものの、思うように力が発揮できずに悩んだり、逆に現地の方々に助けてもらうことは多い。また価値観が大きく変わった協力隊員もいる。

昨年から続く新型コロナウイルス感染拡大の影響で一時帰国を余儀なくされた協力隊員がいたように、ときには活動を中断して帰国しなければならぬ事態が起こることもあるが、どんなことがあっても、任地で体験したことは大きな収穫になるはずだ。

そこで、任地での出来事が転機となり、帰国後、社会を変える活動をしている協力隊OVたちを紹介する。

特集  
帰国隊員が  
社会を  
変える

## Case 1

DX

### Case2

インスタリム 代表  
徳島 泰さん



# 農業を通じた町づくりで 外国人との共生社会の実現へ

NPO法人自然塾寺子屋(群馬県・甘楽町) 矢島亮一さん

豊かな農村地帯が広がる群馬県南西部の町、甘楽町。世界遺産「富岡製糸場」で有名な富岡市と隣接し、かつては養蚕の町としても栄えた。

その甘楽町に、「農村から世界の未来を育てる」をキャッチフレーズに掲げるNPO法人「自然塾寺子屋」(以下、寺子屋)はある。理事長を務めるのは、同県高崎市出身の協力隊OB、矢島亮一さんだ。2001年に任意団体として設立して以降、03年に特定非営利活動法人格を取得、15年に株式会社も設立しながら、途上国と甘楽富岡地域の農村をつなぎ、地域の活性化を図ってきた。

青少年育成や国際協力といった社会活動のほか、イベントスペースや町案

内を併設した古民家カフェを運営。また、農林水産省、JICA、町の行政などからの委託事業として、「協力隊員に向けた技術補完研修」「農業関連で海外へ行く日本人への事前研修」「海外からの農業研修員の受け入れ」「通訳・翻訳サービス」「外国人技術者のサポート」なども行っている。

幅広い活動のなかで特徴的なのが、農業関連事業は地元専業農家に指導にあたってもらい、町をあげて地域外から来る人たちが受け入れていることだ。寺子屋が立ち上げた有志農家ネットワーク「甘楽富岡農村大学校」に所属して協力隊員や研修員に技術指導をする地元農家は、実に78軒にも及ぶ。

農村文化を通して国内外の「人」をつなぎ、育てたい

移住者も外国人労働者も生活しやすい環境をつくります

理事長  
矢島亮一さん  
Ryoichi Yajima

パナマ/村落開発普及員/  
1998年度3次隊

PROFILE  
群馬県出身。東京農業大学卒業後、カナダで山岳ガイド、日本でホテル勤務などを経て、1999年に協力隊員としてパナマへ。帰国後、甘楽町で自然塾寺子屋の事業を始めながら、グローバルな町づくりのため、大学院に進学。甘楽町ならではの町づくりを実践中。

事務局長  
森 栄梨子さん  
Eriko Mori

ホンジュラス/村落開発普及員/  
2010年度4次隊

PROFILE  
京都府出身。高校卒業後米国留学。帰国後、滋賀県で多文化理解教育や外国籍住民サポート事業に携わり、2011年に協力隊員としてホンジュラスへ。現地女性らが寺子屋を通じて農業研修を受けていたことから、帰国後に寺子屋の農業イベントに参加。14年から勤務。

頼れる  
仲間





### 転機

協力隊員としてパナマ共和国へ(村落開発普及員)

**転機** ▶ 村人たちと接し、助けられたことのほうが多いことに気づく。「途上国と日本の農村を連携させたい」



- 帰国後、複数の自治体にプレゼン。「農業を軸にした町づくり」を行ってきた甘楽町に受け入れられる
- 甘楽富岡農村大学校設立。この頃、大学院に進学し国際学を学ぶ
- 自然塾寺子屋を設立(2001年)。任意団体からNPO法人格取得(2003年)後、事業の一部を継承する株式会社自然塾寺子屋を設立(2015年)

- ① さまざまな人種・年齢の人たちが参加した稲作体験の交流プログラム
- ② 日本の農業を学びに来た海外からの研修生。教えるのは甘楽町や富岡市の農家の方だ
- ③ 甘楽町で就農した高野一馬さん(写真左)も協力隊OB。派遣前の農業研修時に甘楽町の魅力にひかれ、1ターンを決意した



### テーマ

▼ 地域活性化、外国人との共生社会、JICA 海外協力隊支援、国際交流、国際協力など

寺子屋では近年、日本で働く外国人技術者に向け、医療面や日本でのさまざまな手続き、職場での人間関係のトラブル対応などをサポートする「グローバル人材生活安心パック」の運営

が経験したように。

「日本の農業の発展・改善のプロセスを、日本の農村から海外の人に伝えていこう。地方に残る人と自然の豊かさを、日本の若者に伝えていこう」。そう考えた矢島さんは、帰国後、出身の群馬県内の農村部の自治体を回り「農業を軸にした町づくりや国際協力活動」の提案を行った。閉鎖的な農村部では、こうした提案に関心を持つ自治体はなかなか現れなかったが、唯一、理解を示してくれたのが甘楽町だった。

とはいえ、最初から甘楽富岡地域の人々が協力隊員や海外からの研修生を快く受け入れてくれたわけではない。外から来た人たちが「教えてもらおう」姿勢を忘れずに、必死になって取り組む。その姿を見た地域の人たちが、一人、また一人と協力者になってくれたのだ。それこそ、協力隊時代に矢島さんが経験したように。

### マイノリティ経験を生かして

「高度成長期、田舎の次男以下の男子は都会に出てサラリーマンになりました。田舎は切り捨てられて、農家の担い手は激減しました。しかし、日本の多くは今でも農村で、地域に根差した助け合いの精神や文化や歴史が残っています。東京だけが文化の発祥地ではない、それに気づかせてくれたのが、パナマでの経験でした」。

多くの協力隊員や海外からの研修員が寺子屋に集まることによって、人が人を呼び、移住者や新規就農者も現れるようになった。寺子屋の事務局長を務める森栄梨子さんもその一人だ。任地のホンジュラスの人たちが寺子屋で研修を受けていたことがきっかけとなり、帰国後に寺子屋のイベントに参加し、移住して働くまでになった。

### 本当の豊かさとは何か？

「ほかに農業を始めたOBや、養蚕を始めたOBもいて、寺子屋があることで、移住者も地域になじみやすい環境があるのだと思います」(森さん)。

矢島さんが寺子屋を創設するに至ったのは、村落開発普及員として活動したパナマでの経験がもとになっている。山間部の村々を徒歩で移動し、現地調査をし、農家の方々へ農業指導をする予定だった。しかし、現地へ行ってみると日本では当たり前にある農機具や道具はなく、「自分の知る農業技術が使えないことに愕然としました。山岳ガイドをしていたのでアウトドアの経験はあったものの、火の焚き付けひとつとっても、道具がないともたつきました。地元の方に教わるこのほうが多かったです」。

隊員とやりとりをするなど皆無の時代だ。孤立無援で奮闘する矢島さんを、パナマの人々は「ともに働く仲間」として受け入れた。そこには貧しいなかでも助け合い、人を思いやる心の豊かさがあったという。

若い頃は実家が農家なのが恥ずかしかつた矢島さんだが、パナマの農家とともに働くうちに「本当の幸せや豊かさとは何か」を考えるようになる。

「高度成長期、田舎の次男以下の男子は都会に出てサラリーマンになりました。田舎は切り捨てられて、農家の担い手は激減しました。しかし、日本の多くは今でも農村で、地域に根差した助け合いの精神や文化や歴史が残っています。東京だけが文化の発祥地ではない、それに気づかせてくれたのが、パナマでの経験でした」。

### 一時帰国の隊員も支援 /

「我々協力隊員は任地でマイノリティの立場を味わっていますから、日本で働く外国人労働者の気持ちが変わりません。農村が培ってきた文化を今に生かしながら、国内外からの移住者も差別なく楽しく暮らせる町、甘楽富岡地域だからできる町づくりをしていきたいと思えます」(矢島さん)。

### 一時帰国の隊員も支援 /

昨年は新型コロナウイルス感染拡大により一時帰国した協力隊員を、婦恋村のキャベツ農家に派遣するプロジェクトを企画した。外国人技能実習生の入国が止まり、人手不足に悩むキャベツ農家と、志半ばで帰国を余儀なくされた協力隊員をマッチングさせたのだ。解団式ではお互いに涙するほどの絆が生まれた。今後技能実習生が来たとき、農家の方々との関係性がさらに良好になることも期待されている。



古民家から「信州屋」には、喫茶、町案内、イベントスペースがある



# 3Dプリンターで作る 安価な義足で新興国を支援

インスタリム株式会社（東京都千代田区） 徳島泰さん

「3Dプリンターで義足を作れないか?」。こう尋ねられたのは、任地のフィリピンで開設した市民工房にいたときだった。

プロダクトデザイナーとして大手医療機器メーカーに勤務し、2012年に協力隊に現職参加した徳島泰さん。フィリピンの貿易産業省に配属され、地元企業でデザインの相談に乗ったり、大学でデザイン教育を行ったりした。

現地で活動を始めると、ものづくりの基本から教えるよりもデジタル機器を使った指導のほうが伝わりやすいことに気づき、JICAと合同でフィリピン初となる3Dプリンターなどを設置したデジタル市民工房を立ち上げた。「工房で廃棄プラスチックを加工した

商品づくりのプロジェクトを指導していたところ、大統領が見学に見えたのをきっかけに、多くの見学者が来るようになりまし。そして複数の方から義足製作の要望を受けたんです」。

調べてみると、フィリピンの貧困層は米主体の糖質過多な食生活が主流で、糖尿病がまん延していた。

「お金がなくて病院に行かずに放置した結果、足を切断するほかない人も多くいました。足が腐敗して動けず、『無駄な食いぶちになるくらいなら早く死にたい』といった声も聞きました」。

これまでの職歴でソフト・ハードの開発、製造ラインの管理、会社経営とひとりの経験があり、途上国の貧困層の方々とも接してきた徳島さんは、「自分がやるしかない」と決意し、3Dプリント義足の開発に着手したのだった。

会社を辞めて、フィリピンでJICAの開発コンサルティングをしながら現地調査を行った。また慶應義塾大学の文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに参加し、給与をもらう研究員の立場で開発を続けた。義足製作ソリューションの開発に3年を費やし、18年にインスタリムを創業。翌年つい

人生を諦めざるを得なかった人たちを助けたい

代表  
徳島泰さん  
Yutaka Tokushima  
フィリピン/デザイン/  
2012年度1次隊

PROFILE  
京都府出身。大学を中退して父親が興した会社を手伝っていた時、中国の取引先工場での廃棄垂れ流しに衝撃を受ける。28歳で多摩美術大学で工業デザインを学び、医療機器メーカーに就職。2012年に現職参加でフィリピンへ。帰国後は義足開発に着手し、18年インスタリム創業。

格安でも体にフィットする義肢装具を作っていきます

職員  
岩根朋也さん  
Tomoya Iwane  
ウズベキスタン/ 福祉用具/  
2018年度4次隊

PROFILE  
島根県出身。幼少期に義足製作で来日した、モンゴル人の少年との出会いをきっかけに義肢装具士養成校に進学し免許を取得。民間の義肢装具製作所勤務を経て、2019年に協力隊員としてウズベキスタンへ。新型コロナウイルス感染拡大のため20年3月に一時帰国。日本で任期を満了し現職。

頼れる仲間

に販売を開始した。現在フィリピンに300名以上のユーザーがいる。

昨年職員の一人に、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて一時帰国したまま任期満了となった、義肢装具士の岩根朋也さんが加わった。志半ばで帰国した岩根さんにとっても、協力隊OBが経営する企業で、同じ理想を追い続けられることは本望だったという。

協力隊員になってから、徳島さんの生活は大きく変わった。「価格が低ければ、あきらめていた人も義足が手に入るかもしれない。歩けるようになれば職に就く可能性も高まります。今後も低価格・高品質な製品を作り、貧困の連鎖を止めたい」。躍進を続けるインスタリムに、世界が注目している。

※デジタルトランスフォーメーション…デジタル技術を活用することで社会や生活を良い方向に変化させること。



## 転機

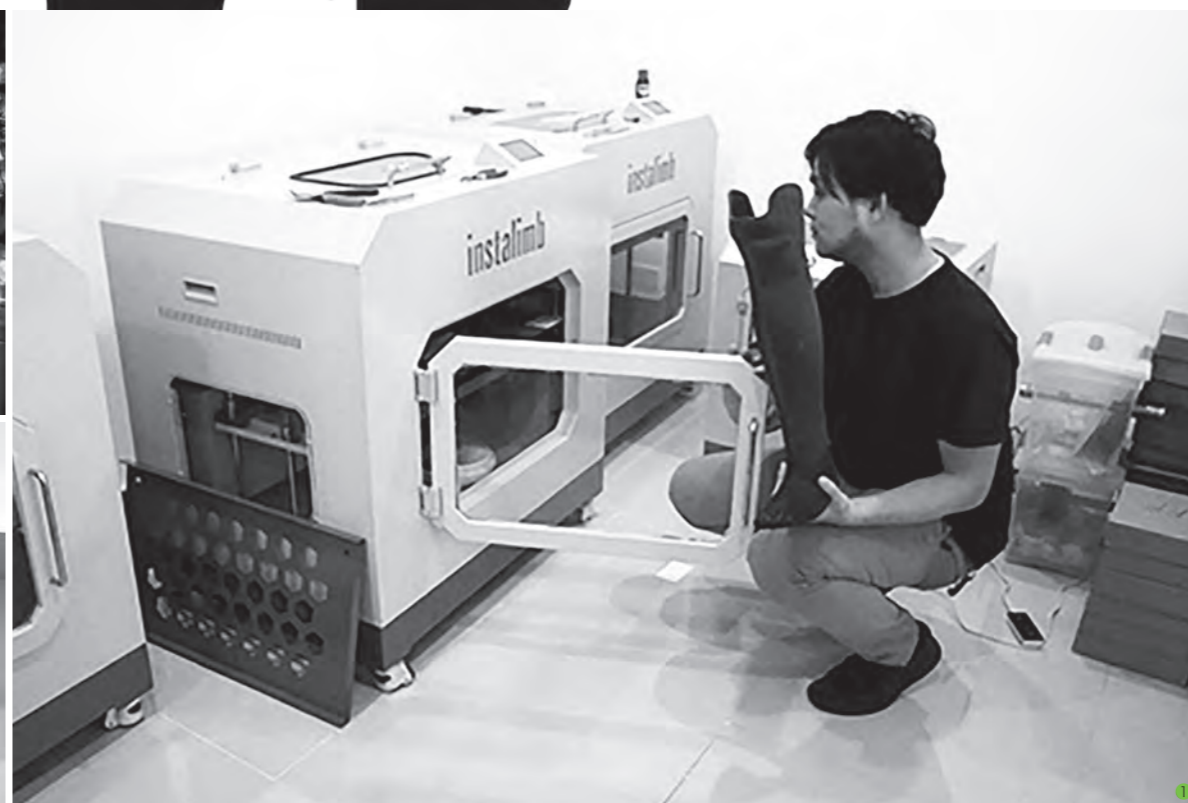
医療機器メーカー在職中に協力隊員としてフィリピンへ赴任(デザイン)

転機 ▶ 市民工房開設。廃棄プラスチックの加工プロジェクトスタート。3Dプリンターによる義足製作の要望を受け、現地調査スタート

- 帰国。前職を退職し、慶應義塾大学大学院で研究員として2つのプロジェクトを続ける
- 合同会社としてインスタリムを設立(2017年)
- インスタリム株式会社創業(2018年)



- 1 インスタリムで義肢装具を作るために開発した3Dプリンター
- 2 フィリピンで使用者へのヒヤリング
- 3 さまざまな義足。左がインスタリムで開発した3Dプリント義足、中央が国際赤十字社の義足、右がインドのNGOが作った水道管パイプを使った義足







### 転機

新卒で協力隊員としてフィリピンへ赴任（理数科教師）

**転機 ▶ 星座も埋もれるほどの星空と、家族の絆や地域の助け合い。現代の日本が急速に失いつつある大切なものに気づく**

- 帰国後、故郷で社会に貢献する仕事を探していたとき廃校活用の話があり、自然学校を提案
- 任意団体として「大杉谷自然学校」を設立（2001年）
- 特定非営利活動法人設立（2007年）



- ① 未就学児と親が参加する「おおだい森のようちえん」は、年5回の自然体験プログラム。大台町教育委員会の受託事業
- ② アユを捕まえる伝統漁法「しゃくり」の継承を行っているところ
- ③ 地域の小学校では、4年生の授業で1年間の林業体験を行う
- ④ 川遊びで手づかみして捕ったアユは塩焼きに



特集  
帰国隊員が  
社会を変える

## Case 3

# 自然体験で子どもたちと 持続可能な社会を目指す

NPO法人大杉谷自然学校（三重県・大台町） 大西かおりさん

任地で活動するなかで、漠然とでも「自分が本当にやりたかったこと」や「心地いいと感じること」に気づけば、具体的なビジネスモデルはなくても、おのずとその方向に歩みだすことができる。故郷の三重県大杉谷地区でNPO法人大杉谷自然学校を運営し、今や地域に欠かせない存在となつていく大西かおりさんもそんな一人だ。

紀伊半島にある吉野熊野国立公園。多様な自然や文化が織りなすこの国立公園の一部に、三重県・大杉谷地区はある。山あいで育つた大西さんが青年海外協力隊の存在を知つたのは、小学生のときだ。途上国で井戸を造る協力隊員の記事に感銘を受け、「いつか私も」と心に誓つたという。

大学を卒業した大西さんは晴れて協

学校の校舎活用案が募集されていた。

「都会に住む人が増えて、子どもたちだけでなく親世代も本物の自然と触れ合う機会が減るなか、自然体験を提供する自然学校が世の中に広く認知され始めた時期でした。そこで、町に大杉谷自然学校の設立を提案したのです」。

大西さんの思いは町に受け入れられ、2001年に大杉谷自然学校が開校、体験型環境教育が始まった。

その中には、地元の高齢者を講師に招き、自然とともに暮らす日常のなかで生まれた「知恵や伝統技術」を教わるといったプログラムもある。

「この地域には、小学校に上がる頃から覚えて、70歳になる頃まで続ける伝統漁法『しゃくり』があります。アユの行動を先読みして釣り上げる漁法で、しゃくりを通して、子どもたちはアユと駆け引きする知恵、川のルール、人付き合いなどを学んできたのです」。

地元小学校では、山で木を切り、乾かし、売るといった一年を通じた林業体験の授業もあるという。

「子どもたちは自然のなかで仕事をすることで、先人たちの知恵や技術を学

力隊員となり、フィリピンの理数科教師

たちへ向け、実験機材の使い方や授業の進め方の指導にあたった。任期を1年延長して挑んだ3年間の活動のなかで大西さんの心に響いたものがある。それはフィリピンの地方に残る雄大な自然や、現金収入をあまり必要としない自然と共存した生き方、そこで育まれる家族や地域の深い絆だった。

「日本でも昔は当たり前だった持続可能な生き方には、文化や知恵や技術が生きています。消えゆく前に、残さなければと思いました」。

1998年に帰国した大西さんは、任地で感じた思いを仕事につなげるにはどうするべきかを考え続けた。

その頃、大杉谷地区では農業や林業に従事する人が減り、廃校になつた小

びます。『昔の日本人のすごさ』は、これからの日本になくはならない力です。人口減少は止められなくても、知恵や技術は子どもたちに継承し、地域の良さを残していきたいです」。

豊かな自然や昔の  
日本人の知恵を伝えたい



校長  
大西かおりさん  
Kaori Onishi  
フィリピン/理数科教師/  
1995年度2次隊

### PROFILE

三重県出身。小学生の頃に新聞で青年海外協力隊の記事を読み、協力隊への参加が将来の夢になる。三重大学卒業後、協力隊員に応募し、1995年から3年間フィリピンへ赴任。帰国後に自然学校指導者の資格を取得し、2001年に大杉谷自然学校を開校、校長に。

### テーマ

環境教育、自然環境保護と調査研究、  
地域支援（自然と共生する町づくり、移住促進など）



このお二人にお話を  
お聞きしました！



くさかりやすこ  
**草苺康子さん**  
村落開発普及員 / 1997年度3次隊・山形県出身

**PROFILE**  
日本マラウイ協会理事。協力隊参加後、JICA海外長期研修・米国大学院を経て、主にアフリカ諸国にてJICA専門家として、またUNDP(※1)、国連大学、世界銀行、東京大学などで勤務。現SATREPS(※2)長期研究員。



みずたにきょうじ  
**水谷恭二さん**  
森林経営 / 1981年度1次隊・福岡県出身

**PROFILE**  
日本マラウイ協会理事。協力隊参加後、1988年に国際協力事業団に入団。青年海外協力隊事務局やマラウイ事務所長としての勤務、四国支部での勤務を経て2018年5月に退職。

## 派遣国の 横顔

## 知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 〈マラウイ〉

1971年の派遣に始まり、今年で協力隊派遣50周年を迎えるマラウイ。このページで、まずはマラウイについてご紹介します。

### マラウイの基礎知識

マラウイ	派遣実績
面積：11.8万平方km <sup>2</sup> (日本の約1/3)	派遣締結日：1971年7月2日
人口：1,862万人 (2019年：世界銀行)	派遣締結地：ブランタイア
首都：リロングウェ	派遣開始：1971年8月
民族：バンツース系 (主要民族はチェワ、トゥンブーカ、ンゴニ、ヤオ)	派遣隊員累計：1,895人
言語：チェワ語 (国語)、英語 (公用語)、各民族語	※2021年8月31日現在
宗教：人口の約75%がキリスト教 (その他イスラム教、伝統宗教)	出典：国際協力機構 (JICA)
※2020年7月28日現在 出典：外務省ホームページ ( <a href="https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malawi/data.html#section1">https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malawi/data.html#section1</a> )	

## 帰国後もかかわり続けたいくなる マラウイの魅力とは？

歴代派遣隊員数が最も多く、協力隊員にはなじみのあるマラウイ。帰国隊員でもあるお二人からマラウイの歴史や文化を教えてくださいました。



世界遺産の「マラウイ湖国立公園」  
(写真提供：草苺康子さん)

アフリカ南東部のマラウイ共和国 (以下、マラウイ) は、タンザニア、モザンビーク、ザンビアと国境を接し、国土の5分の1をマラウイ湖が占める。主要産業はたばこ、砂糖、紅茶、ナッツなどで、国民のおよそ8割が農業に従事する農業国だ。一人あたりの所得は低く、世界最貧国の一つとされている。

1964年にイギリスから独立したマラウイは、独立の2年後にはバングラ初代大統領が権力を掌握。30年もの間、一党独裁制が敷かれた。一方で、自分への反発が起きることを恐れたバングラ初代大統領は人々の生活を大きく制限していたとされている。

しかし、1994年には独立後初めての大統領・議会選挙が行われ、ムルジ大統領政権が誕生した。初等教育の無償化政策が導入され、より

多くの子どもたちに教育の機会が与えられた。

「これまで革命や内戦を経験しなかったマラウイは、アフリカでは平和な国といわれています」と話すのは、日本マラウイ協会理事の水谷恭二さん。1981年度1次隊で森林経営隊員としてマラウイに赴任。2005年からはJICAマラウイ事務所長を務めた。

「マラウイの主食は粉末状の白トウモロコシをお湯と練って作る『シマ』。台湾の農耕隊による稲作の普及で米の入手も容易で、協力隊員にとって食事も口に合ったため、食生活の苦勞は少ないのではないのでしょうか」(水谷さん)

マラウイは『The Warm Heart of Africa』(アフリカの温かい心)との別名を

持ち、これは明るく親しみやすいマラウイ人の性格を例えている。外に出れば、知らない人ともすぐに仲良くなれるのがマラウイ人。困ったときには救いの手を差し伸べてくれる優しい国民だ。

同じくマラウイ協会理事であり、1997年度3次隊・初代村落開発普及隊員としてマラウイに赴任し、現在はSATREPS研究員としてマラウイで研究に励む草苺康子さんはこう話す。

「マラウイは『最貧国』の一つであり、都市を離れると電気や水道の整っていない地域も多く、生活面で苦勞の多い派遣国かもしれませんが、対人関係でのストレスは少ないように感じます。帰国後、再びマラウイにかかわる活動を続けたいという人は多いと思います」

※1 UNDP…国連開発計画  
※2 SATREPS…国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 並びに国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) と独立行政法人国際協力機構 (JICA) が共同で実施している、開発途上国の研究者が共同で研究を行う3~5年間の研究プログラム。出典：科学技術振興機構 (JST) ホームページより



知っていますか？  
派遣地域の歴史とこれから  
(マラウイ)

「OVOP運動」(※1)の草分け  
マラウイでは複数の隊員が取り組むプロジェクトも数多く実施されてきた。1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、身障者雇用・訓練

「OVOP運動」(※1)の草分け  
マラウイでは複数の隊員が取り組むプロジェクトも数多く実施されてきた。1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、身障者雇用・訓練

（情操教育）教科の派遣要請も増えていますが、その背景の一つには、進学率の向上により教育ニーズが高まったことや、民主化といったマラウイ社会の変化があります（水谷さん）  
マラウイ社会で広く知られることになった隊員も多い。例えばマラウイで人気テレビ番組となった国営放送（TVM）の「サイエンスマン」を制作した長谷宏司さん（シニア隊員・プログラマーオフェイサー/2005年度）、マラウイ人歌手と制作したHIV/AIDS予防啓発ソング「ディマクコンダ（愛している）」が国民的ヒットを記録した山田耕平さん（村落開発普及員/2003年度2次隊）など。

「OVOP運動」(※1)の草分け  
マラウイでは複数の隊員が取り組むプロジェクトも数多く実施されてきた。1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、身障者雇用・訓練

「OVOP運動」(※1)の草分け  
マラウイでは複数の隊員が取り組むプロジェクトも数多く実施されてきた。1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、身障者雇用・訓練

（情操教育）教科の派遣要請も増えていますが、その背景の一つには、進学率の向上により教育ニーズが高まったことや、民主化といったマラウイ社会の変化があります（水谷さん）  
マラウイ社会で広く知られることになった隊員も多い。例えばマラウイで人気テレビ番組となった国営放送（TVM）の「サイエンスマン」を制作した長谷宏司さん（シニア隊員・プログラマーオフェイサー/2005年度）、マラウイ人歌手と制作したHIV/AIDS予防啓発ソング「ディマクコンダ（愛している）」が国民的ヒットを記録した山田耕平さん（村落開発普及員/2003年度2次隊）など。

「OVOP運動」(※1)の草分け  
マラウイでは複数の隊員が取り組むプロジェクトも数多く実施されてきた。1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、身障者雇用・訓練

「OVOP運動」(※1)の草分け  
マラウイでは複数の隊員が取り組むプロジェクトも数多く実施されてきた。1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、身障者雇用・訓練

（情操教育）教科の派遣要請も増えていますが、その背景の一つには、進学率の向上により教育ニーズが高まったことや、民主化といったマラウイ社会の変化があります（水谷さん）  
マラウイ社会で広く知られることになった隊員も多い。例えばマラウイで人気テレビ番組となった国営放送（TVM）の「サイエンスマン」を制作した長谷宏司さん（シニア隊員・プログラマーオフェイサー/2005年度）、マラウイ人歌手と制作したHIV/AIDS予防啓発ソング「ディマクコンダ（愛している）」が国民的ヒットを記録した山田耕平さん（村落開発普及員/2003年度2次隊）など。

## 派遣 50周年を 振り返る

技術移転を託された協力隊派遣  
協力隊がマラウイへ最初に派遣されたのは、1965年の協力隊海外初派遣から6年後にあたる、1971年8月のこと。協力隊としては13番目、サブサハラ・アフリカ地域では、ケニア、タンザニア、ザンビアに次ぐ4番目の派遣国だった。  
「当時、日本政府は発足間もない協力隊の派遣先拡大に積極的でしたが、マラウイは、まだ日本大使館がなかった国のなかでも比較的早い派遣事例でした」と話す水谷さん。マラウイ協力隊の歴史を研究する草苺さんも、派遣の経緯について「当時、マラウイ大使も兼ねていた駐ケニア大使による働きかけが大きかったようです。交渉文書からは、経済成長をしている日本からの

技術移転を期待していた様子がかうかがえます」と、話す。

最初の派遣隊員は、漁業統計2名、ラジオ製作2名、測量3名の7名。マラウイの安定した政情を背景に順調に派遣隊員数は増加し、現在は累計1800名を超えている。国別では最多の派遣先となっているが、当初は「協力隊の派遣以前に活動していたイギリスのVSOやアメリカのPeace Corpsなどのボランティア団体が徐々に引き揚げるのに入れ替わりに、協力隊へのニーズが高まっていったのかもしれない」（水谷さん）

マラウイ人の心に刻まれた協力隊  
1800名を超える派遣実績のうち、派遣部門別では、保健医療、教育、農業、保守操作の順に多くなっている。職種別では、理科教育・数学教育、看護師・助産師・保健師、村落開発・コミュニティ開発が上位を占める。  
特に理数科分野の教育が多いのは、マラウイの特徴の一つだと水谷さんは言う。  
「長い間、理数科教師一本やりで、音楽など情操教育の派遣はなく、体育の要請も遅れてからでした。基礎学力の向上が優先されていたからでしょう。近年はExpressive Arts



大統領官邸にて行われた協力隊派遣40周年記念式典（写真提供：日本マラウイ協会）



①OVOPグループで地域の人々の収入向上を目指して作ったパームヤシ油せっけん（写真提供：青木道裕さん）  
②JOCA農民自立支援プロジェクトの一環で、農家にニンニクの植えつけを指導（2007年ムジンバ県にて。写真提供：丹羽克介さん）

※1 OVOP運動…One Village One Product(一村一品)運動は、1980年に当時の大分県知事であった平松守彦さんの提唱により始まった。各地域でそれぞれ1つの特産品を育てることにより地域の活性化を図るプロジェクト。  
※2 MA-SHEP…小規模園芸農家の生産性・マーケティング能力の強化を図ることを目的とした「市場志向型小規模園芸農業推進プロジェクト」



活動の舞台裏

波乱の寮生活

田仲さんが派遣中の2018年5月、TTCでは大きな学生デモが発生した。その原因の一つになったのが「トイレ問題」だ。教室棟の近くにトイレがなく、歩いて5、6分かかかる付属小学校まで行くか、教室棟裏の竹林で用を足すような状態で「こうした生活環境の悪さが学生たちの不満のもとにありました」。デモの際、「学生たちに『タナカはオレたちの仲間だ』と妙な連帯感を持たれたのが面白かった」と振り返る。



部屋の水道から出てきたのは泥水だった  
毎日汗だけで水くみ

理由は日々の暮らしぶりにあった。派遣中は学生寮で暮らした田仲さん。入居早々、水道が出なくなり、1年間、生活用水を近所の教員宅にもらいに行く生活が続いた。「両手に25リットルずつ、背中のバックパックに20リットル背負って、汗まみれで水を運ぶ姿が、学生たちの『共感』につながったのだと思います」

※1 東京2020オリンピック・パラリンピック出場アスリート応援ソング『The Time Has Come』—TANAKA feat. AYAKO— with MALAWI  
※2 同じく2017年度1次隊・小学校教育隊員の平松祐衣さん、栗田優さんと制作した「マラウイ かけ算ソング TANAKA, MALAWI —Tidziwe Multiplication—」  
※3 JUMP ROPE —TANAKA— in MALAWI (マラウイ縄跳び啓発ソング)  
※4 マラウイ生活習慣病予防ソング TANAKA, MALAWI —Samala Moyo—  
※5 ONE WORLD ワンワールド —日本&マラウイ コラボソング— (chorus by students in JAPAN & MALAWI)  
※6 『小さなハートプロジェクト』…(一社)協力隊を育てる会による、活動中の協力隊員と日本の支援者の方々をつなぎ、協力隊員の「地域貢献」を支援する募集型支援金プロジェクト: [https://www.sojocv.or.jp/mbr\\_support/heart/jocv/index.html](https://www.sojocv.or.jp/mbr_support/heart/jocv/index.html)



「縄跳びクラブ」を発足し小学校でも活動していた(後列左から2番目)



活動先の教員養成学校で学生に算数を教える田仲さん(右奥)

実践授業を行って事前事後テストの点数の伸びをデータ化したりするなどして教育現場への導入を図った。  
田仲さん自身も教室でフラッシュカードを持ってノリノリで踊ったり歌ったりしながら普及促進に努めたことで、TTCの教え子のなかにも熱心実践する学生が増えていったという。こうした活動を通して、田仲さんは協力隊に対する「熱い信頼」を感じることも多かったと振り返る。  
「『かけ算ソング』のMVを国営テレビ局に持ち込んだところ、局の幹部が即決で放送を快諾してくれたのには驚きました。彼は過去にも協力隊とかかわった経験があったそうで、歴代隊員

の活動により信頼の土壌が育まれていることを実感しました」  
つながり続けるマラウイとの絆  
TTCで小学校教員を目指す学生との出会いは、ラーニングセンター(ムチンジ県)の建設にもつながった。「派遣中はTTCの学生寮に住んでいたのですが、そこで『地元』に学校をつくりたい」と熱く語る学生ジョナサンと出会いました。教育実習で地元に戻った彼のもとを何度も訪問し、その真剣さをあらためて知ったことで『小さなハートプロジェクト』(※6)を利用させていただきました」

結果、田仲さんの派遣中に2ブロック(教室)が完成。現在は4ブロックに拡張され、4学年が通う正規の小学校になっているという。  
派遣終了後、小学校教諭に復職し、現在は教育委員会に勤務する田仲さんは、最後にこう話してくれた。  
「前勤務校ではマラウイでの協力隊経験を活かし、マラウイと日本の子どもたちの交流活動の一環で、楽曲を制作しました。これからもマラウイとのつながりを持ち続け、二国間の交流を通して、次世代を担う子どもたちには視野を広げてほしい。そんな願いを持って、教育活動に取り組んでいきたいと思っています」

楽しく歌って  
学力向上を目指す  
ここでは近年話題になったOBの活躍をピックアップ。算数の学力向上のため作った「かけ算ソング」を普及させるため奮闘した田仲さんの活動を紹介します。

2021年の夏、東京2020オリンピックに5名のマラウイ代表選手が出場した。彼らに向けたアスリート応援ソング『The Time Has Come(※1)』を同国オリンピック委員会と共同制作したのは、協力隊OBの田仲永和老师だ。  
「この応援ソングは、派遣中に歌作りに取り組んでいたときにつながった現地の仲間にもリモートで協力してもらいながら制作しました」と話す田仲さんは、9年間の小学校教諭経験を経て、2017年、現職参加でマラウイに赴任。首都リロングウェの小学校教員養成校(TTC)で教員を目指す学生向けに算数科・表現芸術科の指導に携

わった。TTCでは週15コマ程度の授業や教育実習の授業評価などを担当。授業の空き時間には、付属小学校へ足を運んで子どもたちに教えることもあった。こうした活動から生まれたのが「かけ算ソング」(※2)だ。  
「かけ算ソング」で感じた熱い信頼  
マラウイでは過去に、協力隊員が制作したHIV/AIDS予防啓発キャンペーンソング『ディマクコンダ(愛している)』がヒットした事例もあったが、「音楽経験もない自分には、活動に音楽を生かす発想はなかった」という田仲さん。だが、付属小学校の放課後を利用して有志の学生と「縄跳びクラブ」の活動を行うなか、縄跳び啓発ソング『Jump Rope』(※3)を制作することになる。そのほかにも「生活習慣病予防啓発ソング」(※4)や日本とマラウイの子どもたちの合作でできた「ONE WORLD」(※5)な

ど、振り返るといくつもの歌を手掛けていた。  
「学生の発案をきっかけに、学生や地域の音楽好きの青年たちと一緒に音源やMV(ミュージックビデオ)も作りました。私もチェワ語で下手な歌を歌わされましたが、思い出づくりにいいかな、くらいの軽い気持ちで参加しました」と笑う。そして、こうした経験が「かけ算ソング」につながった。  
「マラウイの子どもたちの算数の力が伸びない原因の一つに、かけ算が満足にできないことがありました。プリント作りの紙にも不足する状況下、一クラス250人もの子どもたちに効果的にかけ算を教えるにはどうすればいいのか? その答えの一つが『かけ算ソング』でした」  
1の段から12の段までをリズムカルに歌う「かけ算ソング」は、同期隊員や学生と協力して作詞・作曲。教育省と連携して実験校を設定し、各校の子どもたちが出演するMVを制作したり、



たなかひさかず  
田仲永和老师  
小学校教育 / 2017年度1次隊・千葉県出身

PROFILE  
千葉大学教育学部で小学校教員養成課程を卒業したのち2005年から2年間、外務省在外公館派遣員として在中国日本大使館に勤務。08年から千葉県の公立小学校に教諭として勤務するなか、現職参加で協力隊に。現在は千葉県の教育委員会にて学校教育課指導主事として勤務。

CHIKONDI TANAKA  
—MALAWI—  
田仲さんがこれまで手掛けた歌はこちらのYouTubeチャンネルをチェック!





# 専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



【今月の教える人】久保田真弓さん(旧姓 田村)

ガーナ／理数科教師／1980年度1次隊・神奈川県出身  
関西大学総合情報学部教授。インディアナ大学スピーチ・コミュニケーション研究科で博士号取得。専門はコミュニケーション学、非言語コミュニケーション。国際理解教育のサポートを行う関西大学の学生団体「Meet the GLOBE」のプロジェクトでは、日本の小学生や高校生と現役の協力隊員との交流を図る。

今月の  
お悩み

キーパーソンと家族ぐるみの付き合いができなかったため、活動先の課題解決に至らないまま任期満了となってしまいました。

(タンザニア／数学教育／男性)

タンザニアの中学校で生徒たちに物理と数学を教えていました。私に期待されていたのは理数系科目の成績向上でしたが、授業を始めてみると、生徒への英文法レッスンの必要性に気づきました。タンザニアでは小学校まではスワヒリ語で授業が行われますが、中等教育以上の授業は英語で行われていたためです。この課題を解決するために、生徒たちに英文法レッスンなどを実施したものの、多くの教師は仕事に対するモチベーションが低く、私の派遣終了までに英語教師をはじめ、同僚にこれを引き継ぐことができませんでした。その学校では校長先生の力が強く、校長先生と家族ぐるみの付き合いができていれば、教員たちの協力も得やすかったのにと悔やまれます。

久保田先生からの  
アドバイス

活動を「仕事」と捉え過ぎず、  
2年間異文化にどっぷり  
つかってみましょう。

相談者さんは、観察力や分析力に優れている方なのでしょう。物理や数学を教える以前に行うべき課題が見つかり、解決に向けて誰にどう根回しすればいいかを何度もシミュレーションしたのではないのでしょうか。

課題解決において分析は必要ですが、私は分析よりもまずはその国にどっぷりつかって自分が「現地化」することをお薦めします。

仕事はもちろん、オフの時間も、現地の人とともに過ごすことで、近所の方に生活回りのことを聞いたり、近寄ってくる子どもたちと遊んだり、飲食店で店員さんと会話することになります。そうして少しずつ現地の感覚がつかめてきて、周囲と思考が似てくる、それが「現地化」です。

この「現地化」がないまま分析を行うと、日本的な常識がベースにありますから、相手との距離は縮まりません。

「多くの教師が仕事へのモチベーションが低かった」のはなぜか。それを分析する前に、相手の文化や風習に飛び込む。時には相手に頼ったりして自分の弱さを見せることで、相手も心を開いてくれます。信頼関係はそうやって築かれていきます。

家族ぐるみの付き合いをする以前に、校長先生とは日頃からコミュニケーションが取れていたでしょうか。組織の規模が大きく校長先生と会う機会が少なかったとしても、その長となる方は、自分の組織に協力隊として配属された日本人がいることは知っているはず。タイミングを見て挨拶をしに行く、近況報告をする、そうした小さな積み重ねが信頼関係を構築する一歩です。

同僚である教員とはどうでしょうか。いきなりいろいろな人を飛び越えて校長先生と仲良くなるより、同僚たちと強固な信頼関係を築き、一致団結して校長先生

に直談判しに行ったり、皆で週末にパーティを開いて、そこに校長先生の家族を招待するといった方法もあったかもしれません。

私が理数科教師として派遣されていた頃と比べ、今の協力隊員の方は活動を達成すべき仕事と捉えるまじめな方が多いように感じます。同時に、仕事と捉えてしまいがために、オンとオフをきっちりつけた方が増えたようにも感じます。

今は途上国でもSNSで日本人の友人とつながったり、調べものをインターネットで検索したり、オンラインゲームで遊ぶこともできるようになりましたが、私は多くの隊員にとってそれがマイナスに働いているように思います。派遣先で信頼関係が築けなくても、オフの時間に外の世界と接することができるので、寂しい思いをせずに2年間を過ごせてしまつからです。

相談者さんは「自分が派遣先の学校をよくしたい」と思っ

### 「現地化」するコツ3カ条

- 1 インターネットにつながる時間を減らす
- 2 いかなるときも地元の人と接する
- 3 相手から学ぶ姿勢で、弱さも見せる

まり、常に弱さを見せず専門家の立場を貫いていたかもしれません。旅行客とは違い、協力隊員は2年間そこに住むわけですから、小手先のコミュニケーション術ではやっていけません。「現地化」することで相手の状況を把握し、相手の気持ちになつてみる。ぜひ実践していただきたいと思います。



# この職種先輩隊員に注目!

～現場で見つけた仕事図鑑

#0001

## 冷凍機器・空調

分類：鉱工業

冷凍機器・空調整備知識・技術の向上のため、教育施設や公的機関で指導を行う。

派遣中：0人(累計：139人)

類似職種：工作機械、建設機械、電気・電子機器

※人数は2021年8月末現在。



冷凍機器取り扱いの必須アイテム「フレアツール」の使い方を生徒に指導する前田さん(左)

Q メインの活動は？

パラオ唯一の高等教育機関であるパラオ地域短期大学(PCC)に配属され、エアコンの修理やメンテナンスを学ぶ空調科で授業のサポートをメインに行っていました。要請内容は教材の作成や授業の運営・改善でした。加えて、生徒が社会に出たときや、私生活でも有効な5S(※)の指導に、大学関係者を巻き込みながら取り組みました。

Q 活動の最大の困難は？

教材と工具の不足です。エアコンの仕組みを理解するには実物や模型に触れることが理想的なのですが、大学にはそれが完備されていません。それどころか最低限の工具すらないという状況でした。苦肉の策として動画を見せながら仕組みを説明したのですが、私自身がエンジニアなので、やはり実物に触ってこそという思いもありました。そこで、使わない模型やサンプルを提供してもらえないか日本の企業にアプローチ。同時に、物が散乱し放棄されたままの現地の状況を改善しようと、他の学科を巻き込んで5Sの取り組みも始めました。しかし、ちようどその頃にコロナ禍のため一時帰国となってしまいました。

Q 現在は一時帰国中ですが、再赴任に向けての思いは？

日本に戻って考えたのは「なぜ空調科は人気がなく学生が少ないのか」ということです。実はパラオではエンジニアへの関心が低く、ほとんどが外国人です。この状況を変えなくては、学生も集まらないしエンジニアも育ちません。一方で、今後パラオをはじめ途上国では空調機器の需要は増えていきます。まずは空調機器のエンジニアに興味をもってもらうための取り組みや、教育プログラムが必要なのではないか、パラオに再赴任できたら、それも踏まえて活動を見直したいと考えています。待機中は現場での経験を積むためエアコンの据付工事も行っていました。パラオでは据付・修理がメインになるので、この経験を生徒や同僚に伝えていきたいです。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

冷凍機器・空調は協力隊の中では希少職種ですが、長い目で見ると今後必要とされる職種だと思います。皆さんの持つ知識・技術を任地での活動を通して広め、発展させてほしいと思います。やりがいを感じながら楽しんで活動してください。

※5S:「整理」「整頓」「清掃」「しつけ」の頭文字のSをとったもの。職場環境の維持改善のスローガンとして用いられる。



機器の実物も  
工具もない環境で  
知識と技術をどう伝えていくか

前田 司さん  
パラオ/2018年度4次隊

PROFILE  
富山県出身。大学院で熱工学を研究した後、電気機器メーカーに10年間勤務し、主にエアコンの設計開発を担当。新しいことに挑戦したいと思っていた頃、協力隊の募集で「冷凍機器・空調」職種があることを知り応募。2020年3月の一時帰国後はJICA北海道(帯広)で国内協力員として勤務中。

#0002

## 障害児・者支援

分類：社会福祉

教育機関や障害者関連施設などで支援活動を行う。

派遣中：3名(累計：282名)

類似職種：ソーシャルワーカー、高齢者介護

※人数は2021年8月末現在。



授業で教えた日本の歌や手遊びはベトナムの子どもたちにも大人気(中央が清水さん)

Q メインの活動は？

配属先はベトナム中部のフエにある障害児支援施設でした。教員や保護者の支援と、障害に合った指導計画書の作成が要請内容でした。しかし教員には専門知識がなく、授業は生徒の実態に合っていないかったり、同じ内容を繰り返し行ったりしているのが現状でした。授業をするにも教材が十分にそろっていないかったため、まずは授業環境を整えるためにペットボトルなどの廃材で作った教材を使い、私が授業をするところから始めました。

Q 活動の最大の困難は？

同僚との関係です。外から突然やってきた私に「これはダメ」「こうして」と言われるわけですから、やはり面白くありません。授業で生徒との距離が近づくほど、同僚との距離が離れていくのを感じました。そこで、指導や助言をするのを一切やめ、一緒に遊びに行ったり家族の話をしたりして、個人として関係を築くように心がけました。そのうち、楽しそうな生徒の反応を見て、私の授業にも興味を持ってくれるようになりました。そうしてだんだん距離が近づいてきた頃に、コロナ禍で一時帰国することになってしまいました。

Q 一時帰国による影響は？

帰国してからは「いつ帰ってくるの?」というメールが、毎日のように同僚たちから届きました。帰国中は、地元・群馬に暮らすベトナム人のサポートをする傍ら、教材の作り方を動画にして現地の同僚向けにSNSで発信もしました。ベトナムに再赴任したとき、みんなが動画を見ていたことを知って驚きました。一時的に離れたことで、お互いに絆を確認できたような気がします。それからは同僚へのアドバイスもしやすくなりました。以前は日本にいたときと比較して「こうあるべき」と思っていたのが、ベトナムで過ごすうちに「決まった型にはまらなくていいのだ」と、私自身の感じ方も変わっていききました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

同じ障害でも取り巻く環境が違っていると、物事への反応や感情の表し方が違うことを知り、障害児教育に対する私の考え方も活動方針も大きく変わりました。赴任当初は、やろうと思っていたことと現実とのギャップに悩みましたが、自分がいいと思うことを頑張っ続けていけば、きっとまわりの人に伝わると信じています。

現地教員が取り入れやすいよう  
工夫を凝らした教材や  
指導法を紹介



清水 沙悠梨さん  
ベトナム/2018年度4次隊

PROFILE  
群馬県出身。大学卒業後、小学生から高校生までが在学する神奈川県の特設支援学校の教員として5年間勤務。途上国をバックパックで旅行するのが好きだったことと、常に新しいことをしたいと、協力隊に応募。新型コロナウイルス感染拡大により2020年3月から12月まで一時帰国。再赴任後、21年4月に任期満了。



あって良かったモノ

タンザニア

置き場を決めてね /



## 両手が使える！ ヘッドライト

かとうれいな  
加藤 伶奈さん タンザニア／コミュニティ開発／2017年度3次隊・静岡県出身



タンザニアといえば、アフリカ大陸最高峰の山、キリマンジャロが有名です。私が住んでいたロム郡は、そのキリマンジャロの麓にあり、トウモロコシやコーヒー、バナナなどの畑が広がるのどかな農産地でした。

日本のODA（※）で配電網が整備されていたので電気は通っていましたが、大雨が降ると停電になることもありました。

地元の家庭では懐中電灯やろうそく、ソーラー電気などで対応していましたが、私が使っていたのはアウトドア用のヘッドライトです。頭にセットできて両手が使えるので、調理中も安全に手元を照らせます。

一番重宝したのが、シャワー中です。懐中電灯

は置き場に困りますが、ヘッドライトならシャワーや壁のフックにかけられるからです。注意点は、使ったら同じ場所に置いておくこと。これを忘れて、停電時に暗がりのなかで慌てたことが何度かありました。

タンザニアは助け合いの精神が根付いている国で、外出先で困ったことがあれば見ず知らずの人でも助けてくれたりしますが、一人で家にいるときに起こる突然の停電は不安になるものです。

ヘッドライトがあれば、停電なんて怖くない！  
そう断言できるマストアイテムです。

※キリマンジャロ州地方送配電網強化計画（出典JICA：<https://www.jica.go.jp/oda/project/1061200/index.html>）



# ヨルダン発、 「家族愛」お届けします

半澤紗樹さん  
はんざわさき

ヨルダン／経済・市場調査／2010年度1次隊・青森県出身

ヨルダン人は、家族愛にあふれている。「おはよう。元気？」と言って男性同士は握手を、女性同士は頬をくっつけながら挨拶をして、一日が始まる。

挨拶を大事にするヨルダン人は、何通りものフレーズを使ってお互いの様子を確認し合う。相手のことだけでなく、相手の家族の様子も気にかける。「日本の家族は元気？」初めて会う人にも最初に聞くのは家族のこと。

ヨルダン人は離れて暮らす家族や親

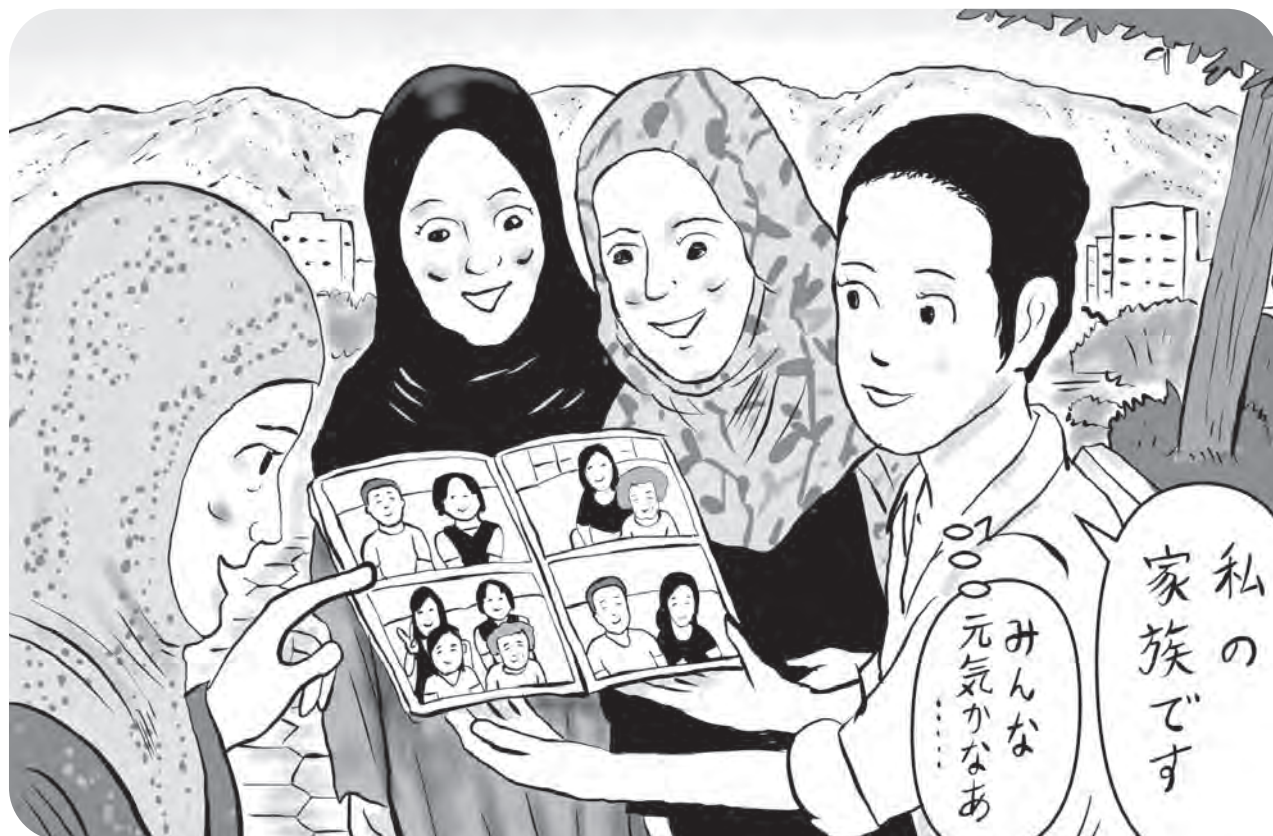
戚などに、毎日のように連絡する。遠く離れていても心の距離は近い。彼らにとって家族を大事にするのは当然のことなのだ。

活動で電気がない砂漠の村へ行ったときも、つたないアラビア語で話すときも、言葉がわからない遊牧民と意思疎通を図るときも、家族の話題で仲良くなれた。だから、どこでどんな人にもすぐに見せられるように、現像して持っていった家族写真が大活躍だった。

「日本人のおじいちゃんやおばあちゃんはどうなの？」「日本人女性はどんな格好で働いているの？」「どんな家なの？」現地の人たちは写真を通して見る日本という国に興味津々で、話題が尽きることはなかった。

日本では「便りのないのは良い便りで、家族に頻繁に連絡しなかったけれど、ヨルダンで家族のことを聞かれるたび、日本の家族をそばに感じられた。

あの日、  
地球の、  
あの場所で。



私の  
家族です

みんな  
元気かなあ

Illustration = 牧野良幸 Text = 大竹幸乃 (本誌)



# シュエカツ記

帰国後、内定までの  
就職活動の方法を聞きました。

## 英大学院進学をやめて就職を選びました



今月の先輩

トキタ種苗株式会社 海外事業本部  
外国部 外国2課 係長  
**来栖弘幸さん** Hiroyuki Kurusu  
モザンビーク/村落開発普及員/  
2009年度4次隊・広島県出身

就職先：  
トキタ種苗株式会社



事業概要：野菜・花卉種苗の品種開発、生産、販売、輸出・農園芸資材開発

来栖弘幸さんの略歴：  
1985年 広島県生まれ  
2008年 アメリカの大学を卒業後、日本で金属部品会社に入社  
2010年 3月～ 青年海外協力隊員としてモザンビークに赴任  
2012年 3月 帰国  
2012年 9月 トキタ種苗株式会社入社。  
海外事業本部外国部へ配属

JICA海外協力隊ウェブサイト  
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」  
[https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career\\_support/counselor/](https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/)

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊の経験者のみとなります。※対応可能な日は希望進路の分野によって異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



日本は農作物の多くを輸入に頼っているが、その元となる種子は日本で開発されていることが少なくない。日本の種子は世界的に評価が高く、占めるシェアも世界でトップクラス。その種苗業界で活躍している先輩隊員が、トキタ種苗の来栖弘幸さんだ。

来栖さんは、アメリカの大学を卒業後、約1年の社会人経験を経て、村落開発普及員としてモザンビークに赴任した。配属先は、農業技術の指導を行っている経済活動事務所。農業の知識などまったくなかったが、農地を巡回しながら情報を収集し、農業用水を

### 1 協力隊時代 2010年3月～



養蜂箱の技術はインターネットで情報を集めた

派遣先は、農業省の下部組織であるモルンペー二郡経済活動事務所。事務所では、農家が安定して作物を生産できるよう、農業技術の巡回指導を主に行っていますが、多くが小規模農家で、なかなか現金収入を得られないという状況でした。取り組んだのは、浅井戸の施工、養蜂箱を使った養蜂の導入、野菜栽培の指導など。当初は何をしたらよいかわからず、まずは職員と一緒に農地を巡回し、とにかく、問題点を見つけ、解決策を考えることを意識していました。

### 2 帰国～就職先探し 2012年3月～

農業経済学を学ぶためイギリスの大学院へ留学することを決めていましたが、入学する9月まで時間があつたのと、農業や開発に関われる仕事があれば就職するのもありだと考え、「PARTNER」をチェックしました。

▶「PARTNER」  
どのような求人があるかチェック。トキタ種苗を含め、農業関係の会社の求人情報を見つけました。

▶JICA中国の青年海外協力隊相談役  
協力隊の経験はあるとはいえ、農業は専門ではないので就職活動に不安もあり、話を聞きに行きました。

### 3 書類提出 2012年7月19日

提出したもの

- ▶履歴書
- ▶自己PR書
- ▶活動報告書

#### POINT

青年海外協力隊相談役からのアドバイスで、自己PR書とは別に、自分を知ってもらうために現地で行った取り組みの報告書を作成。資金調達から販路開拓までを一貫して行ったことを書き、現在の勤務先との面接に至りました。

### 4 面接 2012年8月中旬

面接は、社長との一対一で行われました。協力隊での経験について聞かれた記憶はないのですが、野菜の栽培指導の際に現地で購入した種子が、実はトキタ種苗が開発・生産したものであることを、面接のときに初めて知り、感動したのを覚えています。

2012年8月内定、9月1日入社

※このページで紹介した採用方法は、来栖さんのご経験に基づいたもので、2019年以降は採用方法が若干変更しています。

確保するための浅井戸の施工、野菜の栽培、養蜂箱を使った養蜂の普及などに試行錯誤しながら取り組んだ。

この経験から、将来は農業や開発の仕事をしたと考えるようになった来栖さんは、専門知識を身につけるため、任期終了後にイギリスの大学院で農業経済学を学ぶことを決めた。

ところが帰国後、たまたま見たJICAの国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」の求人情報で、海外で事業展開しているトキタ種苗の存在を知ることになる。

「種子は農業をするうえで、元になるもの。それを海外で売ることができたら面白いなと、漠然と感じました」

いろいろ調べていくうちに、大学院に行くよりもビジネスで農業に関わったほうが勉強になるのではないかと、いう気持ちはいよいよ強くなっていった。そして、面接を迎える頃には、就職することを決めていた。

改良品種を作り出す育種には、非常に時間がかかる。企画から数年かけて作り出した品種を売るまでに、早くも6年、長いものだと言われている。早くも珍しくないという。

「入社から9年、育種から手掛けた品種を、ようやく商品として売れるところまでできました。やりがいも日々強くなっています」

#### 現在の仕事

外国部で北中南米を担当しています。わが社で開発した新品種を、北中南米の各地で試作し、現地の気候に合うかなどの評価を行い、販売しています。現在はコロナ禍のため現地への出張はできませんが、以前は、1回2週間ほどの出張で数カ国を回っていました。代理店探しから



始めたところもあります。どこで何を売るかなど、一から考えて企画する仕事は、協力隊の活動に似ています。

来栖さんが育種から手掛けた大きなきゅうり



#### 会長から一言

1994年から協力隊のOVを採用し、これまで約30人が入社しました。協力隊OVの魅力は、オープンマインドで、元気なところ。知らない場所でも物おじせずどんどん進んでいく開拓精神があるので、頼もしく感じています（時田勉会長）。



#### 後輩へメッセージ

大学院ではなく就職を選んだことを、最初は後悔もしましたが、今はやりたいことができています。選択が間違っていなかったと確信しています。やりたいことをかなえる道は一つではありません。やりたいことがあるのであれば、そこまでの道をフレキシブルに考えてほしいと思います。



## 前田さんの歩み

小学校2年生のとき、母親の勧めで珠算を習い始める。教室には高校1年生の夏まで通い、9段になった。

最初は大会でもらったトロフィーがうれしくて(笑)。練習を重ねるうちに、計算力だけでなく、忍耐力も身についたと思います。

2017年、名古屋大学3年の夏休みを利用し、JICA海外協力隊(短期派遣)でトンガに珠算職種で派遣。

珠算関連のニュースレターで、協力隊のなかに珠算という職種があることを知り、興味を持っていました。

2017年秋の帰国後、トンガや太平洋島嶼国について調べるようになり、大学在学中の協力隊長期派遣を決意。

両親や友人も応援してくれました。

2018年度3次隊として、再びトンガへ。

2020年4月、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、一時帰国、大学に復学。一時帰国者向けの「特別登録制度」に登録し、再赴任を待つ。

2020年8月初旬でJICAとの派遣合意書は契約解除になりましたが、再派遣が可能になった場合に優先的に再赴任できる『特別登録制度』に登録しました。

2021年3月に名古屋大学卒業後、外務省に任期付職員として入省。アジア大洋州局大洋州課で、第9回太平洋・島サミットの運営などに従事する。8月にオーストラリア国立大学大学院に合格。



P28: トンガの海と、教会で交流を深めた仲間たち。「日曜日には安息日で、住民たちは大きな音を出さないように過ごします。私はキリスト教徒ではありませんが、トンガの人たちの考え方を知りたいと思い、日曜日は教会に行っていました」(前田さん)  
上: エウア島で開催されたそろばん大会の様子



# 派遣から 始まる 未来



進学、非営利団体入職や  
起業の道を選んだ先輩隊員

▶ 豪州の大学院へ進学



前田大志さん Hiroshi Maeda

トンガ/珠算/2018年度3次隊・愛知県出身

## 同じ釜の飯を食べて重ねた交流 みんなの笑顔を守りたい

「将来の目標は、実務家として『太平洋の安定と平和』の構築に携わることです」と話すのは、2018年度3次隊の一員としてトンガに赴任し、当地教育省のオフィサーとして、小学校での珠算指導などに従事した前田大志さんだ。目標の達成に向けて経済学と小規模島嶼国の開発政策を学ぶため、22年1月には、オーストラリア国立大学の大学院へ進むことが決まっている。

前田さんが国際協力に関心を持ったのは中学生のとき。きっかけはモンゴルのストリート・チルドレンを追ったドキュメンタリー番組だった。寒さをしのぐために温水瓶パイプに身を寄せ暮らす同年代の子どもたちの姿を見て、「こうした状況がなくなればという漠然とした思いから、貧困や格差の問題に関心をもちました」と振り返る。大学に進学する頃には、その「漠然とした思い」ははっきりとした目標に変わっていた。「途上国支援なのか、国内で社会課題の解決に取り組むのか、まだ模索中でしたが、大学時代に一度は途上国での経験を積もうと考えていました」。

そこで大学3年の夏に行ったのがJICA海外協力隊の短期派遣だ。活動「トンガ人の多くは敬けんなキリスト教徒です。人々の生活の中心にある教会に行くことで、トンガ人を一層理解できるようにになりましたし、いろいろな人と知り合って話をするのが楽しかったです。また、トンガには食べ物シェアする文化があつて、職場でも食事を分け合うのが当たり前でした。同僚が魚の揚げ物や主食であるイモを頻繁に持ってきてくれたので、私も鍋いっぱいのカレーやおにぎりを持っていきました。同じ釜の飯を食べることによって、お互いに悩みを打ち明けたら、驚いたことを話したりと、貴重な時間を持つことができました」

等身大の交流を重ねるなかで、前田さんはトンガをはじめとする太平洋島嶼国の「安定と平和」に寄与するとい

内容はトンガでの珠算指導。小学2年生から高校1年生まで珠算を続けていた前田さんは、暗算9段の腕前で、そろばん大会でも小学生時代から活躍していた。「自分の経験を生かせる募集の派遣先がトンガだっただけで、他の国で募集があったらその国に行っていた」と話す前田さんだが、2カ月の派遣ですっかり「トンガの虜」になっていた。「ホームステイ先の家族や教育省の同僚、教員、それに同じ教会に通う人々など、誰もが垣根なく受け入れてくれて、今まで感じたことのない人の温かさを感じました」。

再訪を心に誓って帰国した前田さんは、大学を休学して、19年1月から長期派遣でトンガに再赴任。トンガ最大の島トンガタプ島西部のヒヒフォ地区の小学校13校を巡回しての授業指導や、教員の指導力向上のためのワークショップの実施に取り組んだ。年7回開催されるそろばん地方・全国大会の企画・運営も重要な活動だった。

さらにこれらの本来業務だけでなく、日曜日にキリスト教会の礼拝に参加するなどを積極的に、派遣国の文化や慣習と向き合い続けることにも努めた。

「幸せそうに暮らす人が多い印象を持ちましたが、トンガ全体としては、気候変動・災害に対する脆弱性や対外債務などの課題も抱えています。町中には18年のサイクロン被害の爪痕も生々しく、国内での雇用機会の少なさに悩む若者の声も聞きました。何かのきっかけで、自分が好きなトンガの人々の「当たり前」が脅威にさらされ、そこにある笑顔が失われるかもしれません。オーストラリア国立大学大学院卒業後の進路ははっきり決めていませんが、協力隊で培った他者を理解する姿勢を大事にしながら、現地の人々の「当たり前」を支え、共により良い未来を構築する活動に取り組んでいきたいです」





待ってます、あなたを！  
各界からのエール

From 日本青年団協議会

東日本大震災時にも多くのメンバーが活動した。「桜ライン311」は、大震災の記憶を風化させないよう、津波到達点に桜の木を植樹する活動



## 広い視野を持ち、世界各地で活躍する皆さんを応援しています

日本青年団協議会は今年で設立70周年を迎えました。青年団は日本の地域を拠点に、「地域づくり」や「人づくり」を念頭に活動を行っています。

一つの地域に住んで、地域の人々と協働して問題解決に取り組み、より良い地域づくりを目指していくというところは、派遣国で活動に取り組む JICA 海外協力隊（以下、協力隊）の皆さんの活動にも似ているところがあるのではないのでしょうか。

また、協力隊の皆さんはその知見や感度の良さ、自分の考えを言語化できるコミュニケーションの高さから異文化への適応が高く、さまざまな課題に対しても広い視野で向き合えることに長けていると感じています。その力は異国の地で生活していくことで鍛えられ、それが協力隊の皆さんの活動が派遣国で根付いていくことにもつながっているのだと思います。

国内と海外では活動の舞台こそ違うものの、地域づくりに取り組む青年団員と海外で培った目線を持った協力隊の皆さんとで豊かな国づくりをしていければ、きつといい化学反応を起こせるのではないかと期待し、私たち青年団は協力隊の皆さんと交流できる日を心待ちにしています。



植樹活動で植えた桜は被災地で咲き誇っている



日本青年団協議会 事務局長

棚田一 論さん

ただなかずのり ● 1983年、埼玉県出身。日本福祉大学大学院を修了後、一般財団法人日本青年館に就職。2009年より日本青年団協議会に入職し、日本青年団新聞や全国青年大会本部を経て、19年より現職。





＼ うちのこだわり /

# OB・OG ショップ

— 国内編 —

佐々木さん夫妻。しょうご農園の鶏たちは、自家製のえさのほか自然に生えている野草もついでにみながらストレスなく育つ

## 鶏の幸せ度を 殻のおいで感じてください

80年代後半に隊員としてコスタリカの農村で土壌改良に取り組み、有機農業を根付かせた佐々木さん。その後JICAの専門家として中米・カリブで農業と環境分野で協力活動にあたった。帰国後の2005年、宮崎県南部の山間地に移住し、夢だった農業を妻の和枝さんと始めた。

「コスタリカで一緒に働いた現地農家の友人が輝いて見えました。隊員としてアドバイスするだけでなく、自分でも責任をもって農業をやりたいんです。42歳のスタートは体力的にもギリギリの年でした」

任地では農業や化学肥料により土がやせ、病害虫の増加と作物の生育不良という悪循環を目の当たりにした。

「作物栽培は天候や病虫害に左右され、豊作だと買ったたかれる。そんな農家の苦

労を見ていたので、有機栽培と自然養鶏を組み合わせた小規模の有畜複合農業を理想とし、持続性のある安定した営農体系を目指しました」

販売している「和卵（かずらん）」は豊かな山林に囲まれた環境で放し飼いされた鶏が産む。地元産の穀物などを独自の方法で発酵させたえさと旬の野草や野菜を与え、薬剤を使うことなく、ストレスフリーで育つ鶏たち。その卵は、卵かけご飯にすると絶品で、食べる人を元気にするという。

「卵を割った後に、殻の内側のおいを嗅いでみてください。うちの卵は、鶏の健康状態やえさの違いから、いやなおいがありません。僕はこのにおいこそ、鶏の幸せ度だと思っています」と、自慢の和卵の見分け方を教えてくれた。



しょうご農園  
かずらん  
山の恵み 和卵

### SHOP DATA

#### しょうご農園

経営者：佐々木正吾さん  
コスタリカ/土壌肥料/  
1987年度3次隊・北海道出身  
所在地：宮崎県都城市高城町有水4872-2  
<http://www.btvn.ne.jp/~shogo.noen/>





現在の派遣国数

25 カ国

# JICA 海外協力隊派遣現況

(2021年8月末現在)



(単位:人)

## ■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	4	
ガーナ	9	
ガボン	11	2
ケニア	6	
ザンビア	2	1
ジンバブエ	9	
ナミビア	1	
マダガスカル	1	
マラウイ	12	
南アフリカ共和国	1	
ルワンダ	16	

## ■ アジア地域

国名	一般	シニア
ウズベキスタン	1	
カンボジア	8	
キルギス	1	
スリランカ	2	
タイ	1	
タジキスタン		1
中華人民共和国	2	
ブータン	3	
ベトナム	4	
ラオス	15	3

## ■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	4	

## ■ 中東地域

国名	一般	シニア
チュニジア	1	
ヨルダン	3	

## ■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ドミニカ共和国	8		4	

## ■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	125 (61/64)	7 (2/5)	4 (2/2)	0	136 (65/71)
累計 (男性/女性)	45,860 (24,343/21,517)	6,559 (5,300/1,259)	1,543 (597/946)	547 (252/295)	54,509 (30,492/24,017)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊

シニア = シニア海外協力隊

日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊



# INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

## AWARD

「世界が尊敬する日本人100」に  
技術顧問の藤掛洋子先生が選出



藤掛洋子 技術顧問 (家政・生活改善、栄養士：パラグアイ/家政/1992年度2次隊) が、2021年8月3日発売の「Newsweek日本版」の「特集：世界が尊敬する日本人100」のなかで、「国境を超えて世界を動かす逸材たち」の一人に選出されました。

藤掛先生から一言：子どもの頃にみたベトナム戦争の写真は私に大きな衝撃を与えました。何かできることはないかという思いを忘れることができず国際協力の道に転向しました。JICAボランティアとしてパラグアイ（家政隊員）に派遣され、現地の方々と協働することから、人々の潜在能力、エンパワーメントの可能性をたくさん教えていただきました。NPOの活動では国内外の仲間たちにたくさん支えていただきました。このたびNewsWeekに選ばれたことは大変光栄なことであり、共に歩んでくれた仲間たちとともに選ばれたと思っております。これからも共に前に進んでいきましょう！今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

### プロフィール

Yoko Fujikake / 横浜国立大学都市科学部長・大学院教授。専門分野は文化人類学、開発人類学、ジェンダーと開発。パラグアイ農村部やスラムにおいて、子どもたちの教育、保健・衛生向上を目指して活動する（認定・特活）ミタイ・ミタクニヤ子ども基金）理事長も務める。

## PROGRAM

テレビ朝日公式YouTubeチャンネル

「DEPARTURE 2021 SUMMER 一次世代インベーターの原点と未来の羅針盤— supported by JICA」を配信中！

経済誌「Forbes JAPAN」による、世界を変える30歳未満の日本人を毎年30人選出するアワード「Forbes JAPAN 30 UNDER 30」。同アワードとテレビ朝日によるオンライントーキョーイベント「DEPARTURE 2021 SUMMER—一次世代インベーターの原点と未来の羅針盤—」に、エシカルジュエリーブランド「maramana」のブランドディレクター・早水綾野さん（ソロモン/プログラムオフィサー/2012年度1次隊）が出演。

早水さんは現地での活動をきっかけにソロモン諸島の貝細エジュエリーブランドを立

ち上げ、サステナブルな社会の実現に向けた活動を行っています。世界を舞台に活躍中の若きバレリーナ・永久メイさんや、「子どもの貧困」の本質的解決に取り組むNPO法人代表理事・李炯植さん、三者三様に活躍する3人の対談をぜひお楽しみください。

さらに、テレビ朝日の地上波でも、青年海外協力隊経験者たちの帰国後の活躍を紹介するミニ番組が放送される予定です。こちらもご期待ください。



## NEWS

クロスロード誌がリニューアル

今月号（10月号）から、カラーページが4ページになりました。「活動に役立つ実践ガイド」の役割はそのままに、各企画を再考し、よりわかりやすい内容や読みやすいレイアウトを目指します。下記クロスロードのQRコードから2021年10月号をクリックすると、一部記事はウェブ上のタイトルをクリックするだけで読むことができますが、誌面をまるごと一括ダウンロードしないと読むことのできない企画もあります。ぜひ保存してご覧ください。



## NEWS

JICA海外協力隊  
2021年秋募集延期について

JICA海外協力隊は昨年11月以降派遣を再開しておりますが、世界規模での新型コロナウイルス感染症の再拡大に伴い、計画的な新規派遣が困難となっていることから、2021年秋募集は延期いたします。

延期後の募集再開は2022年4月に同年春募集と合わせて実施することを想定しておりますが、確定後、JICAのウェブサイトであらためて告知いたします。

## クロスロード [ 2021年10月号 ]

第57巻第9号 通巻671号  
発行日 2021(令和3)年10月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構  
青年海外協力隊事務局  
〒100-0004東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室  
〒101-0052東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階  
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND  
印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

『クロスロード』（通常号）は、  
JICA海外協力隊のウェブサイト  
でも公開しています。



本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。  
アイデアも大募集中です。

今号からリニューアルした『クロスロード』（通常号）はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。『クロスロード』編集室

[crossroads@sojocv.or.jp](mailto:crossroads@sojocv.or.jp)



## 編集後記

JICA事務局：クロスロードがリニューアルしました。カラーページも増え、見やすくなったのではと思いますがいかがでしょうか。また「あって良かったモノ」はあなたにもきっとあるはず！新たなクロスロードへの感想と共にぜひ教えてください。（脇田雄気）

クロスロード編集室：「水は材料欄に不要？」、隊員めし企画で出てきた疑問。「日本の料理本なら材料欄に水は書かないことが多いけど、水が貴重な国なら入れるべき？」—前編集チームからバトンを引き継ぎ、新編集室もわいわいと制作中です。（干川美奈子）



# 隊員めし

現地で作った日本食、  
日本で作る現地めし

## キルギス

### 現地で作った 日本食



きむらあすみ  
木村明日美さん  
キルギス/青少年活動/  
2017年度2次隊・千葉県出身  
(現・JICA千葉デスク国際協力推進員)

### 「コロッケ」

先輩隊員から「キルギス人が喜んで食べてくれる日本の味」と聞き、ホームステイ先で何度も作りました。それもそのはず、コロッケには油、肉、じゃがいも、玉ねぎ、パン(粉)、塩、コショウと、キルギス人が好きなものしか入っていません。ひき肉は牛肉を買ってきたり、ホームステイ先で屠った羊肉のストックをミンチにすることもありました。一般的なレシピより肉を多めに使いましたが、肉なしのコロッケを作った際も好評でした。キルギス料理はシンプルな塩味が多いのですが、アジア食品を扱うスーパーで買った日本製の中濃ソースも人気で、1.5Lのソースをプレゼントしました。

### 日本で作る 現地めし

### 「ナン」

キルギス語でパンをナンと言います。ホームステイ先では一度に1週間分(直径20cm大を5個ほど)作り、常に食卓にありました。焼きたてはみんな大好きで、ジャムやバターをつけて、固くなってくると、砂糖たっぷりの紅茶(現地語でチャイ)やスープに浸しながら食べていました。「ナンさえあれば(健康や幸福など)すべてある」「ナンがある所では嘘をついてはいけない」など多くの言い伝えがあり、ナンはキルギス人の人生に欠かせないものようです。私は帰国してから自宅でナン作りチャレンジしましたが、オーブンがなくとも家庭用のトースターでも作れました。

### ホームステイ先の食生活は？

イシククリ州アクサー村では家畜を飼うのが一般的で、ホームステイ先でも羊30頭、牛20頭、馬7頭、鶏30羽ほどがいて、肉や牛乳、卵は自給自足でした。主食はパンやじゃがいも、麺類やお米です。特徴的なのが炒め物や煮込み料理、炊飯時やサラダにも大量の油を使うこと。私と乳幼児を含む10人家族で、5Lの油が1~2週間で無くなっていました。普段の食事はシ

ンプルでナンと1~2品。冬で食べ物が少ないとなると、ゆでたじゃがいものみという日も連続でありました。一方、行事やお祝い事になると数種類のパンや麺、サラダ、肉料理などをテーブルいっぱい敷き詰めます。お客様を大勢呼ぶので、前日から肉を用意したり、いろいろなパンを焼いたり揚げたりして、おもてなしの準備をしていました。



ホームステイ先の肉をミンチにする器具

#### ●材料(4~5人分)

じゃがいも ..... 5個  
玉ねぎ ..... 1個半  
牛か羊のひき肉 ..... 350g  
塩、コショウ ..... 適量  
卵 ..... 1個  
パン粉 ..... 適量  
小麦粉 ..... 適量  
揚げ油(揚げる鍋に合わせて) ..... 適量



ホームステイ先が大家族だったため大量に作った

#### ●レシピ

- 1 じゃがいもを塩を入れた水でゆでる
- 2 玉ねぎをみじん切りして少量の油で炒め、キツネ色になってきたら肉と塩、コショウを加えて炒める
- 3 じゃがいもがゆであがったらお湯を切って皮をむき、お玉などを使ってつぶす
- 4 じゃがいもと2を混ぜて冷ます  
※味見をして塩加減を確認し、足りなければ塩、コショウを加える
- 5 4を好きな大きさに丸形にし、表面に小麦粉、溶き卵、パン粉の順につけていく
- 6 フライパンに入れた揚げ油を170°Cくらいに温めて5を揚げる

#### ●材料(4~5人分)

強力粉 ..... 250g  
ドライイースト ..... 3g  
塩 ..... 小さじ2杯  
砂糖 ..... 小さじ1杯



発酵して膨らむナン

#### ●レシピ

- 1 材料すべてと水(170ml)を混ぜてこねる
- 2 ラップをして1時間程度放置する(発酵させる)
- 3 生地が膨らんだら、3つくらいの塊に分けて丸める(トースターの場合は平たくする)
- 4 200°Cに温めたオーブン(またはトースター)で15~20分焼く

家族全員に大好評の  
ニッポンの洋食!  
「コロッケ」



人生にも食卓にも  
欠かせない  
「ナン」



親族や隣人などをおもてなし



行事の日の食卓は華やか



普段の食卓。ナンは常にテーブルにある





グアテマラ

民族衣装の生地を使った  
グリーティングカード

マヤ文明から続くグアテマラの民族衣装の生地を使ったグリーティングカードが定番商品。  
作り手の名前を記入するために、字を書く練習から始めた子もいた

勉強を続けることを諦めざるを得なかった  
女の子たちの夢をかなえるために

協力隊時代にグアテマラへ派遣され、先住民(インディヘナ)の子どもたちに花作りを教えていた白石光代さん。家の手伝いに追われ中学進学のお機会さえ奪われるインディヘナの娘は、大人になるなかで夢を諦めていく。女性たちの困難な状況を知り、同国・ソロラへ移住して立ち上げたのが「グアグア・プロジェクト」だ。畑仕事を終えたインディヘナの女の子たちに民族衣装の生地を使ったカードを制作してもらい、販売した売上金はすべて彼女たちの収入と支援に充てる。「グアグアと鳴きながら立ち上がりしようとするアヒルのひたむきさに、自立を目指す彼女らの姿を重ねました」。

セミージャの生産パートナーには、ソロラの母親たちもいる。家事や子育ての合間をやりくりしながら、織物、刺しゅう、

ビーズ細工など、特技を商品作りに生かしている。観光ガイドで生計を立てながら長くこの活動を続けてきた白石さんだが、コロナ禍で2020年に帰国を余儀なくされた。「その後メンバーから『仕事がない』というメッセージが届きました。事情が好転するまで待つこともできたでしょうが、コロナ禍における彼女たちの状況は決して甘いものではないと考え、20年12月、活動を再開しました」。

刺しゅう糸や布など制作に必要な材料を日本で手配し、国際宅配便で発送。彼女たちが作った商品が日本に届き次第、ショップで販売する予定だ。

「商品を作り続けることは、メンバーの生きる力になります。それを購入して手に取ってくださった日本の方々へも、何かが伝わることを願っています」。



＼ うちのこだわり /

OB・OG  
ショップ

— 海外編 —



SHOP DATA

グアテマラ フェアトレードショップ  
セミージャ (semilla)

経営者: 白石光代さん  
グアテマラ/花卉栽培/  
1999年度1次隊・埼玉県出身

ウェブショップ  
<https://semilla.stores.jp/>

就学支援活動「青い空の会」  
<https://www.aoisoranokai.org>



semilla

Text=村重真紀 写真提供=セミージャ



見やすくて読みまちがえにくい  
ユニバーサルデザインフォント  
を採用しています。

